

目次

寄稿: アメリカの博士課程に行く前に知っておきたかったこと 1-2
(中込翔)

寄稿: 博士研究から起業という道のり 3-4
(城口洋平)

寄稿: 海外で大学教員・研究者としてやっていくということ 4-6
(飯田史也)

寄稿: 8年前の自分に伝えたい事 6-7
(大倉有麻)

寄稿: アメリカの博士課程に行く前に知っておきたかったこと

ヒューストン大学
中込翔

自分の肌が焦げるような日差しもどこへ行ったのか、肌にまとわりつくような湿気だけを残し、今年もヒューストンの冬来たる。気温の落差が激しいので余計に寒く感じる。昨日30度を超えていたと思ったら今日は5度。冗談じゃない。でもまあヒューストンだしなあ、と納得できるぐらいにはここに長くいることになる。そんなヒューストンを離れるのは学会がある時ぐらいで、つい先日「常夏の楽園」サンディエゴに行ってきた。4年ぶりに再会する大学時代の悪友たちと親睦を深めつつ、ふと「かけはし書いてみない？」と打診されたのが今回筆を持つに至った経緯である。その時は快諾しつつも、いざ極寒のヒューストンに帰ってきてみると悩むわけである。何について書くべきか。何しろアメリカに来てから四年間一度も日本に帰っていない自分である。日本語すら怪しい。ていうかそんなこと考えながらスタバでそわそわしてる俺怪しい。なんてことを考えていたら思い出したのがアメリカに来る前の不安と期待にそわそわしていた自分だ。アメリカの大学院に単身来るとするのは冒険だ。帰国子女で人生の半分海外で過ごしていた自分でさえ冒険だったのだから、日本以外の国に住んだことがないという人の心境は正直想像しきれない。今回はそんな人たちに向けて「アメリカの博士課程に行く前に知っておきたかったこと」について書こうと思う。

はじめに言っておきたいのだが自分は「天の邪鬼」だ。どれぐらい天の邪鬼かというとポケモンGOがリリースされた直後、チュートリアルと称して近場に出てくる100%捕まえられるポケモンを無視して20km離れた中華街に別のポケモンを探しに行くぐらいには天の邪鬼だ。なのでここに書いてある自分の体験に基づく「知っておきたかったこと」がまったく読者に響かない可能性も、トランプがさらに4年政権を続けるぐらいある。そんなときはさらっと流して「ああ滑ってんなあ」「痛いやつやなあ」ぐらいに思っておいてくれれば幸いである。

そんな準備で大丈夫か

「そんな準備で大丈夫か？」と聞かれたら「一番良いのを頼む」と返すのはもはや常識だろう。ここで言う「装備」とは「日本の歯医者」のことだ。悪いことは言わない。アメリカに来る前に日本の歯医者で最高のサービスを格安で受けてくるんだ。アメリカの医療費が高い、と耳にしたことぐらいはあると思うが、アメリカの大学院の薄給でかろうじて生き延びている状態でその洗礼を受けたやつは少ないだろう。あれはアメリカに来て最初の年の冬だった。ブラックフライデーで散財し「今年の冬も厳しくなるな」と覚悟を決めた農家のようにラボに引き籠もっていた12月のことだ。突然奥歯が痛みだし、日に日に増す痛みで歯痛に頭痛、それに耐えかねてひたすら筋トレで自分を追い込んでいたんだけどやっぱり痛いから歯医者に行こうとなっていた時期だ。なんでも親知らずが4本とも生意気にも自己主張を始めたようで、アメリカの歯医者にして“This is crazy!”と言わしめたほどである。何はともあれ正直痛みで研究ができないので抜歯してもらうことになるわけだが、デフォルトの設定が全身麻酔に全抜歯である。sonでもって保険でカバーしても\$2000ドルは余裕で超えてくるんだからホームレスの



Fig 1. アメリカはリスがかわいい。チタタブにして食べてしまいたいぐらい。

要因の一つが医療費破産というのも納得の値段設定だ。気分はまさに教会の蘇生費用を払えずに棺桶を引き摺りながら蘇生代を稼ぐ惨めな勇者である。悪いことは言わない。日本で歯医者に行ってからアメリカに来るんだ。

金の切れ目は縁の切れ目

アメリカの大学院は「大学に博士課程として入学する」というよりも「研究室という会社に博士課程というポジションで就職する」という考え方をしたほうが良い。なぜなら会社ならば当然成績が振るわなければ首を切られるからだ。アメリカの大学院において首を切られるというのは特段珍しいことではない。ただ自分たちのようなインターナショナル生徒たちにとってはこれは死刑宣告も同然で、わざわざアメリカまで飛んで来たのにそりゃねえぜとっつぁん!という感じである。自分のラボでも何人かそうしてパトラッシュしてしまったのだが、得てしてこういう首切りが起こるのがグラントの切れ目だ。アメリカの研究室は基本的にグラントありきで成り立っていて自分たち博士課程の学生の給与もそこから出てきている。グラントには当然期限があるわけで、悲しいかな博士課程の5-6年間をずっとサポートしてくれるような大型グラントはなかなか取れるようなものではない。大抵が2年ぐらゐのグラントでアメリカの教授たちは絶えずグラントを出しながら、生徒たちの指導をしながら、時には教壇にも立ちながら、子育てをしつつ、マラソンやロードバイクのレースにも出て「いや教授何人いたらそんなことできんねん!」というツッコミを入れられつつ自転車操業しているのが多くのアメリカのラボの実態だ。

「じゃあどうすりゃええねん?」という君のもっともな疑問に対する答えは一つ。「教授と頻繁にコミュニケーションを取れ」だ。なぜかアジア人は教授を神聖視するのかあまり頻繁にコミュニケーションを取ろうとしない。結果が出てなくてもいい。それでも教授に「今こんな感じです」と頻繁に会えばザイオンス効果で好きになってもらえる。いや、真面目な話、頻繁なアップデートにおける教授のアドバイスで道が開けたことは数え切れない。それが結局は研究室での成績に繋がり「今年もなんとかやっていけそうだべ」となるわけである。



Fig 2.アメリカ三種の神器。ダンベル、プロテイン、BCAAがあれば生きていける。ジェントルマッスルを目指している。

「人間性を捧げよ」はダメ、ゼツタイ

何故か日本人は人間性を捧げるのが得意なように見受けられる。これはもちろん自分も含めての話だ。確かに「ここぞ!」というところで捧げるのはありだが、そう毎度毎度人間性を捧げているようでは魂がすり減ってしまう。せっかく「効率化の国」アメリカに来たのだから彼らからワーク・ライフ・バランスについて学ぶべきだ。具体的には「取捨選択」と「アウトソーシング」だ。湧いて出てくるタスクを依頼されるたびに「Yes, we can!」では財政が立ち行かない。「Let's make America great again!」と自分本位に考える時があっても良い。アメリカの大学院に来る日本人は20代後半に差し掛かろうという時に来ることが多い。もう大学の時のように徹夜して

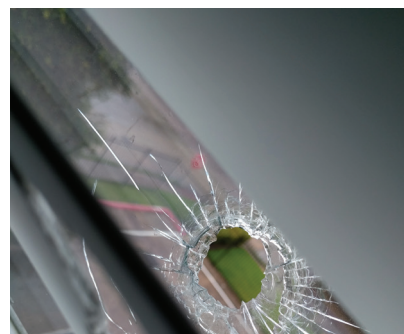


Fig 3. アメリカは銃の国である。写真は何年か前うちのリビング(3階)の窓ガラスに突如として生まれた銃痕。まさにエンジョイ&エキサイティング

「明日のテストマジやべえ」とか出来る時代は終わったということ肝に命じておくべきだ。もう若くないんだ。スマートに行こう。自分がすでに持っているタスクとその状況、かかりうる時間を2, 3倍で見積もった上で自分に残された時間をもとに新しいタスクを受けるべきかどうかを判断する。無理だと判断したら思いきってNOだ。嫌われる勇気を持とう。次に大事なのがアウトソーシングだ。自分ひとりですべて抱え込むべきではない。それはプロジェクトを期限以内に完遂するという立場に立ったとき、最もやってはいけないことだ。チームを作り、人を動かす。カーネギー先生に習ってアウトソース出来るところは遠慮なくアウトソースするべきだ。



中込翔
ヒューストン大学
ブレイン・マシン・インターフェイスラボ
Twitter: @gomessdegomess

寄稿: 博士研究から起業という道のり

次の人生をかける国として選んだ留学先

「仕事が一区切りつき、従来からの目標の1つであった海外留学を実行できるチャンスが訪れたから」という、この文章を読んでくださっている皆さんの多くと変わらない理由から、全てが始まりました。修士留学をしたい、という気持ちからスタートしましたが、それが結果、博士課程への進学、その後起業という、自らの人生を大きく影響づけるものになることは、当時から頭の片隅にはあったものの、可能性の1つ、という程度でしかありませんでした。

海外留学を考えた時、アメリカ、イギリス、その他諸国など複数国を検討しました。実際、北京大学も見学しに行ったくらいに幅広く検討しました。留学、というのをただの1、2年の勉強と捉えると面白くありません。私は、1つの人生の転機であり、「自分が次の人生の10年をそこに賭けられる国・分野にしよう」、と定義をして、分野、国の両面で探索を始めました。結論から言うと、私は、「エネルギー x イギリス」という組み合わせを選びました。その中で、様々な選択肢を手当たり次第探していたところ、たまたま運よく、ケンブリッジ大学工学部修士課程に拾ってもらった、と言うのが正直なところです。



Fig 1. ケンブリッジ大学ゴルフ部としてオックスフォード大学と対戦した。

「エネルギー」という分野選びは、3.11東日本大震災が1つのきっかけでした。神戸で中高を過ごした自分にとって、震災というのは強く思う部分があり、3.11を契機にエネルギー問題という分野に関心を強く持ちました。それと同時に、エネルギー自給率が低くそれが貿易収支を圧迫している日本経済においても最重要分野であり、また再生エネルギーの普及やスマートメーター設置などの技術革新により100年ぶりの大転換を迎えている分野である、ということも同時に知りました。私の専門は統計分野だったので、エネルギー自体は当時門外漢ではありましたが、学部時代に専攻していた統計分野を掛け合わせることで、エネルギー分野でも十分面白い研究ができるのではないかと考えました。それが結果として、スマートメーターで収集される電力情報のデータ分析、機械学習を活用した予測モデルの構築、などにつながりました。

「イギリス」という国選びは、エネルギー分野を決めたことによる要因が半分、残り半分はもっと私的な理由でした。真面目な話からすると、エネルギー分野は、制度・規制の影響を強く受ける分野でもあるため、他分野のように必ずしもアメリカが一番いい、と

いう訳ではありません。むしろ、日本の電力制度は歴史的に英国式を踏襲してきています。また、パリ条約などのムードと、トランプ旋風もあり、クリーンエネルギーなどの先進的なエネルギー分野の取り組みは欧州の方が進んでいる、というのが有識者の認識でもありました。ですので、アメリカの大学よりも欧州、その中でも英語圏であるイギリス、というのが最有力候補として浮上しました。加えて、やはり国、というのは、自分がそこに住む、そこにいる人と付き合っていくことになるので、居心地がいい、第二の故郷、と考えられるような国でないと難しいな、と思いました。その上で、中国、インドネシア、シンガポール、インド、ケニア、エジプト、イスラエル、など本当に色々な国を、「次の10年、自分が住むんだったら？」という視点で大学も街も見てまわり、自分の中で納得感があったのはイギリス、というのが正直なところでした。

修士ではなく博士を勧める理由

特に、イギリスの場合は、修士ではなく博士留学を勧めます(アメリカだと少し事情が違ふと思います)。イギリスの場合、修士は1年しかありません。一年といっても実際は6ヶ月ほどで、残り3ヶ月はレポートやインターン等で授業はないケースがほとんどです。最初の6ヶ月なんて、引越しをドタバタしているとすぐ終わります。この期間は、学習分野における専門性を身に着ける上でも、その国でネットワークを作る意味でも不十分だと思います。私も当初は「1年で修士卒って言えるならいいじゃん」と思っていたのですが、実際は意味ないな、と思い直し、修士入学した直後に博士進学に切り替えました。

博士は通常は4年です。修士と合わせると5年は、確かに長い。だけど、だからいい、と思っています。分野の専門性を身につけるには5年くらいのコミットは必須です。そして、卒業後にもう10年はその分野の専門家として仕事をしていけるくらい将来が明るい分野をしっかりと見つけコミットすることに大きな意味はあります。逆にいうと、学部等の延長線で博士進学したり博士研究を選んだ人は、大抵失敗しているように見えるので、そこは明確に分離して、次の10年、自分の人生を賭けられる分野、という視点で選ぶべきだと思います。実際、多くの人は5年のうち数年をインターンなど実質的に働いて過ごします。私は機械学習系の研究室にいましたが、大半がGoogle、Facebook、DeepMindなどで「インターン」という形で有給(それととてもいい!)で働いていました。そう考えると、博士課程もそこまで長い期間に感じないかもしれません。

留学と起業

私は博士中にエネルギー分野で、2社起業しました。1つ目はCambridge Energy Data Lab社(現 ENECHANGE株式会社)です。当時は、ケンブリッジでエネルギーデータの研究所を設立する、という話を某企業から頂き、それに協力する形で始まりました。「研究所」なので、そこから様々な可能性を試行錯誤した上で出来上がった事業を形にしたのが、ENECHANGE株式会社です。同社は、日本の2016年の電力自由化に合わせて電力切り替えサー

ビスなどを軸にビジネスを展開しております。、現在創業3年で社員数も100名規模になり10億円以上も資金調達をするなど、日本のエネルギー業界では有数のベンチャー企業となっています。2つ目はSMAP ENERGY社で、私の博士3年目に行っていた研究成果を元に指導教授と大学知財部の支援を受けて設立しました。株主にも教授とケンブリッジ大学が名前を連ねる正真正銘の大学発ベンチャーとなっています。こちらは、スマートメーターのデータ解析サービスを、イギリス、日本をはじめとする世界中の電力会社に提供しています。両社の詳細は、様々な記事やインタビューで見つかると思うので詳細割愛します。

博士課程のテーマで起業するためには、その分野の専門家として向こう10年、仕事をしていける自信をつけることに加えて、その分野自体が盛り上がっていること、という2つの要素が揃っていることが必要だと思います。特に私がここで強調したいことは後者です。博士研究は4、5年ほどかかります。すなわち、「5年後に盛り上がる分野」を的確に予想しその分野の博士研究のプロポーザルをかく、というのが大切な仕事になります。論文を書くときに、Introductionで、なぜその研究が必要なのか、将来性はどうか、を議論すると思います。そこに自分の人生を賭けられるくらいの情熱を込めて書く、というのが博士研究の第一歩なのだと思います。



Fig 2. ケンブリッジ大学研究室での議論の様子(2014年春)

人生を賭けた分野を世の中に提供する

偉そうなことを言いましたが、私は現在、博士課程を休学し、上記2つの会社経営に取り組む傍ら、土日の時間で少しずつ博士論文を書き進めている、出来損ないの博士学生でもあります。先日、Energy(学会誌)への論文発表も通り、ようやくゴールが見えてきました。「ベンチャー経営に博士なんていないんじゃないですか?」と聞かれることも多いです。しかしながら、私は心から、「博士課程から、研究分野に基づく起業家をもっと誕生すべきだ」と思っています。博士課程で人生を賭けた分野を世の中に提供する、という自分にしかできない価値を、もっと多くの博士課程の人に実現してもらいたいと思っています。そんな未来のために、自分は少しでもそれを体現する役割を担おうと思い、いつかそういう後輩の相談に親身に乘れる人になろうと思いながら、日々論文を少しずつ書き進めています。今回の寄稿が皆さんの将来を考えるうえで少しでもお役に立てば幸いです。



城口洋平
ケンブリッジ大学工学部

寄稿: 海外で大学教員・研究者としてやっていくということ

ケンブリッジ大学
飯田史也

海外への最初一步を踏み出したのが1999年なので今からちょうど20年前ということになる。今振り返ると随分と無駄な苦労や回り道をしてきたと思うことも多いので、本稿では20年前の自分に伝えたいことを少し書いてみようと思う。この記事の読者のほとんどは筆者よりも若く、留学を準備しているか、留学の初期で色々と考えることもあるかと思うので、筆者がどうして「海外で大学教員・研究者としてやっていく」ことになったのかを書くことで少しでも読者の人生設計の参考になればと思う。

外国人として生きていくということ

海外において自分が外国人であるという事実は良くもあり悪くもある。最初は悪いことばかりが目につく。自分の言いたいことは伝わらないし、日本語でやればすぐに終わるような仕事も何倍も時間がかかる。人種差別まで行かなくても、外国人であるというだ

けで軽く扱われることも多い。もしかしたらどうにもならないかもしれないという恐怖感が何度となく襲ってくる。(大概是思い過ごしでなんとかなるものなのであるが。)

その一方で外国人であることがプラスに働くことについてはあまり気づかない。特に留学したばかりの頃はそんなことを考える余裕もない。あとになって思うのは外国人としての一番の強みはいろいろな「しがらみ」から解き放されることかもしれない。最初は家族や同僚や友達もいなく、人間関係が完全にリセットされる。見方によっては自分の人格をリブートして再定義することができる。これまでに積み上げてきた人格は必ずしもこれからの人生や仕事に最適であるとは限らず、自分の人格を一から好きのように作り変えることができるというのは途轍もないチャンスである。

外国人であれば知識や習慣の無知を利用して風変わりな人間になることもできる。もちろん本人は真っ当なことをしているつもり

であるが、現地の人から見れば全く違って見える。この風変わりであると思われることは意外と利点をもたらすこともよくある。突拍子も無いことを言ってもあまり不思議がられないし、そのアイディアがユニークな発見として評価されることも少なくない。研究者としては大いに利用すべき特権と言えるかもしれない。

アカデミアに残るということ

筆者が留学した頃の頃は自分が海外のアカデミアで研究者として残るというキャリアパスをあまり考えられなかった。周りにはものすごい技術や知識を持った同僚がたくさんいたし、言語能力でも劣っている自分がこの世界で生き残っていけるとは到底思えなかったからだ。

しかし振り返ってみると、もし将来に海外に残って生きていくことを考えるのであれば最初から研究者になることを決めて取り掛かっておいた方が良かったのかもしれない。前述の通り、海外で外国人として生きていくということはそれだけでたくさんのハンディキャップを負っており、常識が通じる他の人たちに比べると色々な意味でプロフェッショナルとしての扱いが難しい。しかし海外に居続けるためには社会人としてのビザや永住権をとるために、なぜ自分がそれをとるに相応しい人間であるかを必ず証明しなければならない。一般に研究者であるということだけでは誰にでもなれるものではないという証明になり海外で生きていくためには都合が良い。

その一方でそんなに苦労して海外にしがみつかななくても、日本に帰って好きなことをすれば良いでないかという考え方もある。筆者がこれまでそうしなかったのには、ひとつは「帰ろうと思えばいつでも帰れる」と思っていた節がある。実際は海外に長くいればいるほど帰るのは少しずつ難しくなっていく。仕事上のコネや研究成果も海外向けになって行き、パートナーや家族の関係で帰るのが難しくなっていく場合も多い。もうひとつは海外で形成された人格をもう一度「日本仕様」に戻してやり直すというのも勇気のいる決断である。

それでは海外で研究者としてやっていくということはどうか？ビジネスの世界であれば「お金」という世界共通の評価基準があるので、成功するためにはそれを増やすことを考えれば良いが、アカデミアではそうもいかない。アカデミアは、少なくとも原則としては、「お金だけが全てではない」という価値観で「偉さ」を計ろうとする世界である。この世界の大変さは「偉さ」の評価基準が一意に決まっていないところである。論文をたくさん発表した人と優秀な学生をたくさん輩出させた研究者はどちらがより偉いのか？答えはないが、それでもこの問題には決着をつけなければならない。なぜならアカデミアにプロとして残れる席には限りがあり、外国人として他の現地人を押しのけてでもその席を得ようとするのであれば自分の方が偉いことを証明しなければならないからである。このような評価基準がはっきりしていない競争にどのように勝ち残るかを早い段階から考えておくことは無駄ではないであろう。

奇跡は思いもよらないところからやってくる

アカデミアで職を得るのは現地のエリートにとってでさえ厳しい競争である。様々なハンディキャップを負っている外国人が逆転するには奇跡を起こすしかない。ではこのような奇跡とはなんであろうか？サイエンスやネイチャーなどのトップジャーナルに論文を載せること、巨額の研究グラントを当てること、その分野のトップ研究者に指導を受けること、等々考えられるかもしれない。何が奇跡かを考えておくことは大切なプロセスで、奇跡が起こりそうなシナリオをいくつも持っておくことは大切である。とはいえ、それらを計画的に実現するのは不可能で、計画的に実現できるのならばそれは奇跡でも何でも無い。

では奇跡はどこから来るのか？よく考えてみるとアカデミアの世界は「人のつながり」が重要な役割を果たしていることがわかる。論文や研究グラントの採否の決定、優秀な共同研究者の発掘、新しい研究アイディアの議論相手等々、奇跡は人との関係性の中からもたらされることが圧倒的に多い。自らの研究スキルを磨いて道を切り開いていくことはもちろん必要不可欠であるが、他の多くの優秀な研究者に囲まれるための方策を考えておくことも同等に重要である。自分が将来やれることはある程度予測ができるが、他人がたらしてくれることは想像の範囲を超えている。これを利用するのが奇跡を起こし続けるためのレシピなのかもしれない。

楽しむということ

このように留学してからの体験を振り返ってみると大変だったことばかりが思い出されるが、これらの困難を乗り越えてこられたのはそもそもその裏に楽しいことがたくさんあったからに他ならない。様々なできないことができるようになり、日本では到底会うことのないような人との出会いや、思いもよらなかったことを発見したり実現したりできる。留学をして以来、筆者が一番変わったと思うのはあまりがむしやりに頑張りすぎないことである。人のできることには限りがあり、その限界の中でどうやって奇跡を起こし続けるかが問題である。起こるか起こらないか分からないものに対してどうやって対峙していくか？そのためにはそこに至るプロセスを楽しむことでしかないように思える。楽しくないものは続かないし、続かなければ奇跡も起こせない。



飯田史也
ケンブリッジ大学工学部

寄稿: 8年前の自分に伝えたいこと

8年前に、私はこの恥ずかしいニュースレターを書きました。それから8年、卒業して会社に就職して学んだことを皆さんに伝えたいです。始めに、アメリカで博士を取得して、役に立ったこと、役に立たなかったことを伝えます。そして、就活と就職後について学んだことを紹介します。留学中と留学後の進路について、この記事が少しでも参考になればと思います。

博士が役に立ったこと

1. 借金をせずに卒業することができました。博士課程まで進んで、博士課程に在籍している間は学費を払わず、給料と奨学金を頂いたので 学生ローンなどを組まずに済みました。多くのアメリカ学生が大きな借金を背負って大学を卒業することが多いです。そのため、借金なく卒業できたことは大きなメリットです。
2. 会社での初任給が高かった。博士課程の在籍期間も実務経験としてみなされるので、初任給は少し高めです。またアメリカは、会社によって初任給は大きく違うので、自分に自信がある方は低い初任給から始めなくて良いです。日本は初任給は低いかもしれませんが、その分会社の福利厚生が非常に充実しているので、一概に比較にはできません。
3. 会社で働き始める時期を遅らすことができたことです。仮に、人生70歳まで働くとしたら、働く期間が人生の大部分を占めてしまいます。僕はそれがとてもアンバランスな気がしてなりません。そのため僕にとって会社で働き始めることを遅らせることができたことは良いことです。



Fig1. 研究室のみんなでBBQ(筆者後列右端)

博士が役に立たなかったこと

1. 卒業後に希望していた機械系の設計開発の仕事に就くことができなかった。僕は、設計開発の経験もなく、博士まで取得してしたので、多くの会社から機械系の設計開発のポジションには、オーバークオリファイド(overqualified)だと見なされました。希望の設計開発のポジションに就きたいため、履歴に博士を取得したことを隠して会社に履歴書を送ったこともあります。高学歴が邪魔になり、希望のポジションからは良い返事がもらえなくて、正直つらかったです。結局、僕は回り道を

して最初は大きな企業で別のポジションにつき、機会を見計らって内部で別のポジションに応募し、希望の設計開発の仕事に就くことができました。この傾向は、就職する分野によって大きく違うと思います。例えば、バイオ系では博士を取得することで、就職の幅は広がると聞いています。このことから、自分の就職したいポジションと学位のレベルを合わせることは大事です。

2. 日本の会社に就職を考えると、応募できる企業数が少なくなります。就活の時期と卒業の時期が異なり、留学経験のある学生を採用したい企業の中から(海外のキャリアフェアに参加している企業など)就職先を探すことになります。逆に、競争率が低いので大企業に就職しやすいかもしれないという良い点もあります。

ここからは、就活中そして就職後について紹介します。

アメリカ就活はコネ、日本就活はある意味平等

ドライだと思われているアメリカでも、就職活動はコネです。僕はアメリカの就活がコネ社会だと知らなかったため、他の人と一緒に馬鹿正直にウェブサイトを通してレジュメを送り、ほとんど返事が来ませんでした。知り合いを通してレジュメを会社に送り、そこから面接に行くのが1番良い方法です。そして、面接後には必ずフォローアップ(ありがとうメールと一週間後に審査はどうですかメールなど)をすること。このフォローアップメールがあるかないかで、どれだけやる気があるかどうかを判断している上司もいます。働き始めてからも仕事のポジションに空きがあると、上司から誰か知っている人はいないかと聞かれることがあります。そのことから良い人材を出来る限りコネで探すのが、アメリカの基本です。人事ではなく、雇用する上司が通常の仕事の合間を見つけてレジュメを見るために、ウェブサイトから応募された大量のレジュメに目を通すことは時間がかかるので嫌います。将来は、ウェブサイトの検索エンジンと同じように、より多くのレジュメのデータを学習して、よりふさわしいレジュメだけを表示するようになれば、アメリカの就活もコネ社会から、日本のような平等なウェブエントリーに少しシフトしたら面白いですね。



Fig2. 就活が終わりShastaで息抜き観光中にPluto Caveにて

給料の交渉

就活を通じて幸運にも複数の内定を同時にもらった時、僕は複数の会社と給料の交渉をしました。その中でも、忘れられないのは、スタートアップからオファーをもらった時のことです。喫茶店で待ち合わせをして、いくらならうちの会社に来てくれると言われたので、精一杯の背伸びしてちょっと高いけど自分の欲しい年俵(\$110,000)を言いました。ところが、あっさりとその場(喫茶店)でOKが出てしまった時には、もっと大きな金額を言えばよかったと心の残りがります。そして、この場でこの書類にサインしてねと言われました。まさか喫茶店で就職の書類に合意するとは思っていませんでした。ビビって冷や汗垂らして情けないですが、ちょっと考えさせてほしいと喫茶店を後にしました。会社によって、就活の進め方が大きく違うと実感させられました。

それとは逆に、日本で内定を頂いた時には、ダメもとで人事の方と給料の交渉を試みたら「何言っているの?」という居心地の非常に悪い空気が漂ったことは今でも忘れられません。文化が違うと交渉できない場合がありますが、何も失うことがなければ、いろいろな選択肢をも持って交渉すると良いです。



Fig3.仕事仲間と一緒に昼食会(筆者後列右から4番目)

自分のポジションは、自分で勉強して探し続ける

アメリカは、仕事のポジションに沿った人が欲しいので、ポジションは変わらない限り同じ仕事を繰り返すことになります。つまり人材を育てるというよりは、すでにそのポジションに沿ったスキルを持った即戦力を探します。そのため、研究職に就く、早く昇進する、またはポジションを変えない限り仕事は似たようなことの繰り返しになりやすく、数年経つと学びの機会が減ります。小さな会社だといろいろな仕事が回ってくる可能性がありますが、大きな会社だとそのような事は少ないです。また、景気に大きく左右される産業(半導体や製造業など)で働くと、利益が出ない部署は切ることがあるので、本人が優秀でも能力とは関係なく、部署がつぶ

れて首になったり、会社を強制的に一時的に休業(シャットダウン)して、学ぶ機会と同時に賃金も失うこともあります。現状のポジションに満足できない人は、転職をしたり、自分で勉強をして他のポジションを探します。今のポジションよりも学ぶ機会と給料が多く得られるポジションを求めて、アメリカでは多くの人が転職します。

逆に日本の会社では、事業が先行きを予想して、会社内で社員の仕事のポジションを変える事があり、転職をしなくても他のポジションでまた新しいことを学ぶことができるので、その意味で良い点もあります。

僕は飽きやすい性格なので、数年を過ぎて仕事に慣れ始めると、物足りなくなります。そのため、自分でオンラインコースを取ったりして、ウェブで自分の知らない分野を学んでいます。8年前と比べると、就職や仕事について経験と知識を得ましたが、変わっていないこともあります。それは、「自分のやりたいことは何かな?」といつも探し続けていることです。やりたいことだと始めても、数年経つと想定していたものと違ったり、当然飽きたりもします。自分の置かれている現状を感謝するとともに、より刺激的で挑戦的なポジションを求めて、日々勉強して自分の満足できるキャリアを探し続けて行きたいです。



大倉有麻
スタンフォード大学機械工学科博士課程卒業
Lam Research Corpに勤務

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

高野 陽平 辻井 快 佐藤 拓磨
松島 和洋 塚本 翔大 本岡 志麻 大谷 将史

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。